（２）各学系の研究

---

①　学校教育学系

ア　研究の特色

学校教育学系は，教育哲学，教育社会学，道徳教育，キャリア教育，生徒指導 ・教育相談，教育経営学，教育制度・行政学，教育方法臨床， 学習過程臨床，情報教育，総合学習，教育実践，教育心理学，発達心理学，学校社会心理学，幼児教育学，幼児心理学，保育内容の研究，生活科教育学（上越教育大学教育研究組織規則【最終改正平成 31 年３月 22 日規則第４号】第３条による）を主な研究領域としており，教員養成大学としての本学の教育・研究の根幹をなす研究領域を幅広く担いながら，それぞれの専門領域の立場から教育実践研究に取り組んでいる。全学的な教職必修科目を担当する教員も多く，また教員免許状更新講習においても，必修・選択必修領域の講習の多くの部分を本学系教員が担当するなど，学内においても地域貢献においても，大人数を対象とした講義・講演を担当する機会が多いことは，本学系の大きな特色である。加えて，国・地方自治体，地域社会，学校等に至る，全国の教員研修や講演会の講師も数多く手がけており，学術研究にとどまらず，実践的・臨床的な視点を携えながら，広く学校現場に開かれた研究活動に取り組んでいる。専門職学位課程の教員は，「学校支援フィールドワーク」を中心として，学部生・大学院生の指導のみならず地域の学校の支援に大きく貢献しており，また全国の研究会講師や実践研究の取組をもリードしている。

なお，令和元年度より，改組によって，多くの教員が専門職学位課程のスタッフとなったため，現在本学系に所属の 46 名のうち，修士課程の所属は４名であり，残り 42 名は専門職学位課程の所属となっている。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

本学系は，多領域にまたがって教育・研究に取り組み，学会における研究発表と論文の投稿，著書の刊行なども進めている。また，学外においては，国・地方自治体，地域社会，学校等に至る各種の研修会・講演会の講師や公開講座，出前講座の講師等でも成果を上げている。

科研費の応募も多くの教員が行い，採択もされているが，学内においては，予算の関係で縮小された学内研究プロジェクトの特別研究に新規に採択された３件のうち，以下の２件が，本学系の教員が代表を務める研究である。

・小学校プログラミング教育導入期における教師の学び支援研究（特別研究）

・学校-大学-民間連携による STEAM 教育推進体制の確立（特別研究）

課題としては，学系の組織の在り方を再検討する必要がある。なぜなら，引き続き検討されている大学改組の中で，本学系の構成員が現状のままであるとすると，本学の各専攻・コースに散らばる可能性があるからである。現在でも，本学系については，多領域にまたがるため学系会議を開催しにくい状況にあるが，ますます会議を開催しにくい状況に置かれることになると危惧される。

② 臨床・健康教育学系

ア 研究の特色

本学系では，臨床心理学に基づいたいじめ，不登校，ひきこもり，発達障害，児童虐待，PTSD などのこころの問題の解決に向けた研究や教員のメンタルヘルスに関する研究に加え，他分野として，医療や司法・矯正分野での研究，特別支援教育の基礎理論，各種障害（視覚障害，聴覚障害，知的障害，肢体不自由，病弱，情緒障害，言語障害，重複障害，発達障害）の心理・生理学，診断法，指導法に関する研究，学校健康教育学，医科学，養護学、栄養学等に基づいた学校における健康教育に関する研究が行われている。心理教育相談室，特別支援教育実践研究センターをはじめとする臨床研究の場において，いずれのコース・科目群も学校における喫緊の課題に対応するための臨床的，実践的研究を展開している。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では，心理教育相談室，特別支援教育実践研究センター及び地域の学校等において多様な臨床研究が展開されており，これらの成果は，関連学会や大学紀要の他，『上越教育大学心理教育相談研究』や『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』においても公表されている。また，学校及び地域社会を含めた健康教育（学校安全，学校保健）や健康課題への対応に関する研究も盛んに行われている。

このような研究活動の一環として，今年度は次の８件の学内研究プロジェクトが実施された。

・中学校の教師を対象とした「ポジティブな行動支援」に関する研修プログラムの効果
・特別な支援が必要な児童生徒への合理的配慮の提供に関する学校のチーム力を高めるための研究・研修の内容と方法について
・特別支援教育における他職種連携に基づく個別の教育支援計画作成･支援会議の実践的検討-他職種との連携による学習会を通して-
・附属学校と連携した特別な教育的ニーズのある子の学習支援プログラムの開発
・学校実習におけるアクティブラーニング型授業の情報保障に関する研究
・読み書きに困難が見られる児童が在籍する通常学級における学習支援：英語の授業での音韻意識指導の効果
・聴覚障害児の文章理解における図表活用に関する研究-概念図を含む文章の読解過程に着目して-
・各教科等の授業における教科教育と特別支援教育の専門性を生かした合理的配慮の設定とその評価に関する実践的研究

また、心理臨床コースが、学外での活動として，上越市地方創生推進事業「上越子ども支援プロジェクト」に参加した。

このように，本学系の構成員は，それぞれの領域の専門性を活かして，学内のみならず地域においても活発に研究活動を継続している。臨床心理学コースにおける公認心理師及び臨床心理士の資格取得に向けた対応や，特別支援教育コースにおける６年一貫プログラムの策定・実施，学校ヘルスケア領域における保健管理センターとの連携強化など，本学系の特色を活かした教育・研究活動の更なる発展が期待されており，それらの実現に向けた教員スタッフの充実が急務となっている。

③　人文・社会教育学系

ア　研究の特色

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は，国語学，国文学，国語科教育，書写書道，英語学，英語科教育，小学校英語教育，異文化コミュニケーション，歴史学，地理学，地誌学，法律学，経済学，社会学，宗教学，社会科教育，国際理解教育，日本語教育と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため，教科に関する組織として，本学系の教員と多数の卒業生，修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」，「上越英語教育学会」，「上越教育大学社会科教育学会」の３学会が組織・運営されており，活発な活動がなされている他，各教員が学会における口頭発表やポスター発表を行い，加えて毎年優れた論文を各専門学会誌に発表するなどしている。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

上記のように，人文・社会教育学系に属する主な研究領域は，国語学，国文学，国語科教育，書写書道，英語学，英語科教育，小学校英語教育，異文化コミュニケーション，歴史学，地理学，地誌学，法律学，経済学，社会学，宗教学，社会科教育，国際理解教育，日本語教育と多岐にわたっている。

特筆すべき点として，各教員が所属する上述の専門領域に関係する学会において，各種の学会賞や論文賞を授与されてきたことも本学系の大きな特色である。加えて，公開講座，出前講座の講師等を含め，他大学・専門学校等における非常勤講師等で多大なる学内貢献・学外貢献を行って成果を上げてきた。

その一方で，令和４年度からの教職大学院への移行を見据えて，修士論文に代わるどのような研究を大学院生に課すのか，またそれは学校支援プロジェクトで代替されるのか等に関する検討は喫緊の課題であると言えよう。同時に，所属の教員についても，これまでの専門研究に加え，教職大学院に所属する教員としての実績づくりの在り方など，真摯な検討が望まれる。

④　自然・生活教育学系

ア　研究の特色

自然・生活教育学系は，数学，理科，技術，家庭の４つの専門分野の教員によって構成されている。

数学の分野では，７月 27 日に「数学教室修士会」と称して数学ならびに数学教育の講演会を開催し，数学教室教員ならびに大学院学生及び大学院修了生の研修を行った。また，「上越数学教育研究」35 号を刊行し，教員ならびに大学院修了生等の研究論文を掲載した。継続して算数・数学の授業に直結した教育研究を行っている。

理科の分野は，二つの学問領域から成り立っている。一つは教科教育学，もう一つは，教科内容学である。前者は理科教育学であり，後者は物理学・化学・生物学・地学からなる。この二つを合わせて，相互に影響し合いながら，理科の分野を構成している。理科教育学では，カリキュラム論，探究学習，理科の授業論，科学概念形成，理科評価論，問題解決，防災・減災教育など，現在求められる課題を含めて多様な分野の研究をした。これらは学校における理科の授業実践などを改善することにつながっている。教科内容学では，固体物理学，分析化学，動物，植物，化石，星間物質を対象に各教員が自分の専門領域の研究を行うとともに，その成果をもとに物理学，化学，生物学，地学の学問領域における教材開発や素材の研究を行うなど各教員の専門性を背景とした教育の研究を行った。これら二つの学問領域により理科分野では，子どもたちの資質・能力を高めることを目指している。また，令和４年度の大学・大学院改革に関わる情報を複数の大学から収集して，教育課程について検討した。さらに，各教員は外部資金の応募に取り組み，研究を深めようとするとともに，上越地域の小・中学校の理科の教員が主催する上越物理・化学同好会や上越科学技術教育研究会のメンバーとなり，会が主催する発表会の講師になるなど地域の理科教育の発展に努めた。

技術の分野では，メカトロニクス教材の開発を中心としたエネルギー変換技術の研究や，情報ネットワークやＩＣＴに関する技術，木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに，全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。また，平成 30 年度から 31 年度学内研究プロジェクトに，学習の基盤となる資質・能力である「プログラミング的思考」を生かしたカリキュラムと題材開発（代表　大森康正）が採択された。この研究プロジェクトは，新潟県立教育センター，長岡市内および柏崎市内の小・中学校４校との共同研究として実践を中心とした研究を行っている。その成果については学会等で発表すると同時に，新潟県立教育センター主催の研修会において，地域の教員等に対して成果の還元が行われた。さらに，学外活動として，上越市内，妙高市内および糸魚川市内において小・中学生を対象にプログラミングや材料加工に関する学習指導・実践も行っており，学校現場の課題に対応した取組や地域貢献活動も積極的に行っている。

家庭の分野では，各専門分野における研究及び教育・実践を通して，社会環境の変化により生じた複雑な生活課題を適切に解決することのできる，専門的な資質・能力を持った人材を育成することを目指している。そのために，各種教員研修や地域貢献も積極的に行っている。特に，令和元年度は，「第 34 回国民文化祭・にいがた 2019，第 19 回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会」において，妙高・上越エリアの事業に参加した。上越市出身で応用微生物学の世界的権威でもある坂口謹一郎博士ゆかりの地で行われた発酵文化をテーマとしたイベントに，トークゲストとして参加した。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

本学系では，学校現場に送り出す教員の質保証に配慮し，教科教育や教科内容の視座からの教材開発

やカリキュラム研究に真摯に取り組んでいる。各々の教員は，講義や卒業研究・修士論文を通して，教科の専門性はもちろん，教員にふさわしい思考力・判断力・表現力を備えてもらうべく，責任を持った学生の指導にあたっている。各専門分野における最先端の研究内容についての知識を提供することに加えて，教員養成大学の一員という立場から，本学が主催する公開講座，出前講座，附属中学校わくわく大学デーなどに率先して参加している。そこでは，各教員の専門性を生かしたユニークな講座が展開されており，そのいずれについてもきわめて高い評価を得ていることが，事後のアンケート結果，感想等からも明らかである。

また，本学系に所属する教員の研究業績の中には，国際誌へ採録された論文が多数あり，国際的に活躍している研究者が複数いることは特筆すべきことといえる。しかし，将来的には教員数の減少が懸念されており，個々の業務負担が増えることが予想されるため，国際的にも評価の高い研究成果を創出できる環境をいかに維持していくかが課題である。さらに，今後は，教科教育，教科内容，地域貢献などの視点に立った教育体制の整備が急務になると思われるため，地域貢献へのさらなる進展や教員の充足は大きな課題といえる。

⑤　芸術・体育教育学系

ア　研究の特色

芸術・体育教育学系に所属する教員の主な研究領域は，声楽，器楽，作曲，音楽学，音楽科教育，絵画，彫刻，デザイン，工芸，美術理論・美術史，美術科教育，体育学，運動学，学校保健，体育科教育といった音楽，美術，保健体育の教科に関連した基礎的及び応用的な研究領域からなる。また，これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり，近隣の学校や地域において音楽や美術，スポーツの普及・発展に尽力するとともに，コンクールや競技会において審査員や競技審判等を委嘱される機会も多い。令和元年度も本学系では各教員の専門を生かした地域貢献活動が活発に進められたほか，教科や領域を超えた学際的な教育，研究が進められた。

イ　優れた点及び今後の検討課題等

本年度に実施した上越教育大学研究プロジェクトとしては，「教科教育カリキュラム構想のための基礎的・実践的研究ー「21 世紀を生き抜くための能力」を育成する教科指導法の観点からー」（H30～R 元年度／研究代表者：阿部靖子，研究分担者：時得紀子，尾崎祐司，五十嵐史帆，周東和好），「健康管理に特別な配慮を必要とする子どもの学級担任を支援するための「地域連携コモンズ」形成の試み」（H30～R 元年度／研究代表者：大庭重治，研究分担者，池川茂樹，他）などがあった。三軸加速度計を用いた「逆上がり」学習用フィードバックツールの開発（R 元年度：池川茂樹），テーピングが手関節バリスティック動作時の筋活動に及ぼす影響（R 元年度：松浦亮太）また，産学共同研究として「5-ALA 摂取と持久性トレーニングの併用が若年者の好気呼吸能に及ぼす影響」（池川茂樹，SBI ファーマ株式会社との共同研究），自治体と連携した地域貢献活動としてあいづまちなかアートプロジェクト 2019 における「会津の鳥瞰図～空からみたわたしたちのまち～」（代表者：伊藤将和他）を行った。

さらに，科学研究費採択については，「教員養成系大学の「知」を活用した美術館連携モデルの実践的研究」（研究代表者：五十嵐史帆），「 疲労困憊後に余力は残っているか 」（研究代表者：松浦亮太），「能動的学習による音楽科授業プログラムの日米豪共同開発：音楽づくりを軸として」（研究代表者：時得紀子），「教員養成における音楽授業プログラムの国際比較研究：領域横断的な視点から」（研究代表者：時得紀子）に交付された。「伝統音楽の教授法・学習法とその変化～明治・大正期能楽を中心として」（研究代表者：玉村恭），「能楽及び能楽研究の国際的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究」（研究分担者，玉村恭）

その他に、上越教育大学大学教員表彰において、教授の部において周東和好が、准教授・講師・助教の部において五十嵐史帆が受賞した。全学から各部に１名のみが表彰されるが、両方とも当学系からの受賞であった。

このように学系所属の教員により活発に研究が進められた。